

数理統計

箱

2025 年 4 月 27 日

概要

数理統計の基礎を解説する.

目次

1	統計モデル	1
1.1	統計モデル	1
1.2	十分性	2
1.3	完備性	4
1.4	指数型分布族	5
2	推定	6
2.1	不偏推定量	6
2.2	Fisher 情報量	7
2.3	最尤推定量	10

記号と用語

- 集合 \mathcal{X} を考えるとき, その部分集合 \mathcal{A} の特性関数を, $1_{\mathcal{A}}$ と書く.
- T を集合 \mathcal{X} から可測空間 \mathcal{Y} への写像とすると, T を可測にする \mathcal{X} 上の可測構造の中で最小のものを, $\sigma[T]$ と書く.

1 統計モデル

1.1 統計モデル

定義 1.1 (統計モデル) 可測空間 \mathcal{X} とその上の確率測度の族 $(P_{\theta})_{\theta \in \Theta}$ との組 $(\mathcal{X}, (P_{\theta})_{\theta \in \Theta})$ を, **統計モデル** (statistical model) という. \mathcal{X} をこの統計モデルの**標本空間** (sample space) といい, Θ をこの統計モデルの**パラメータ空間** (parameter space) という.

$(\mathcal{X}, (P_{\theta})_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとする. このとき, \mathcal{X} から集合 \mathcal{Y} への写像 $\phi: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{Y}$ を, しばしば**統計量** (statistic) という. また, 各 $\theta \in \Theta$ に対して, 確率空間 $(\mathcal{X}, P_{\theta})$ 上の確率変数としての期待値, 条件付き期

待値, 分散, 共分散を, それぞれ $E_\theta[\phi]$, $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$, $\text{Var}_\theta[\phi]$, $\text{Cov}_\theta[\phi, \psi]$ などと書く (ϕ と ψ は有限次元実線型空間に値をとる可測統計量であり, \mathfrak{F} は \mathcal{X} の可測構造の部分 σ -代数である).

1.2 十分性

定義 1.2 (十分性) $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとする.

- (1) \mathcal{X} の可測構造の部分 σ -代数 \mathfrak{F} がこの統計モデルに対して**十分** (sufficient) であるとは, 任意の可測集合 $\mathcal{A} \subseteq \mathcal{X}$ に対して, \mathfrak{F} -可測関数 $1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$ であって, 任意の $\theta \in \Theta$ に対して条件付き期待値 $E_\theta[1_{\mathcal{A}}|\mathfrak{F}]$ の代表元であるものがとれることをいう.
- (2) \mathcal{Y} を可測空間とし, $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{Y}$ を可測統計量とする. T がこの統計モデルに対して**十分**であるとは, σ -代数 $\sigma[T]$ がこの統計モデルに対して十分であることをいう.

命題 1.3 $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとする. \mathcal{X} の可測構造の部分 σ -代数 \mathfrak{F} に対して, 次の条件は同値である.

- (a) \mathfrak{F} は統計モデル $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ に対して十分である.
- (b) 任意の有限次元実線型空間 \mathcal{V} と $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -可積分な可測写像 $\phi: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ に対して, \mathfrak{F} -可測写像 $1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ であって, 任意の $\theta \in \Theta$ に対して条件付き期待値 $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$ の代表元であるものがとれる.

証明 (b) \implies (a) 条件 (b) が成り立つとする. このとき, 任意の可測集合 $\mathcal{A} \subseteq \mathcal{X}$ に対して, 条件付き期待値 $E_\theta[1_{\mathcal{A}}|\mathfrak{F}]$ の $\theta \in \Theta$ によらない代表元 $1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}$ がとれる. 任意の $\theta \in \Theta$ に対して, 条件付き期待値の順序保存性より, P_θ -ほとんど確実に $0 \leq 1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}} \leq 1$ である. そこで, $1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}}$ の 0 以下の値は 0 に, 1 以上の値は 1 に修正して得られる関数を改めて $1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}}$ と書くと, これも条件付き期待値 $E_\theta[1_{\mathcal{A}}|\mathfrak{F}]$ の $\theta \in \Theta$ によらない代表元である. よって, \mathfrak{F} は統計モデル $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ に対して十分である.

(a) \implies (b) \mathfrak{F} が統計モデル $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ に対して十分であるとする. 任意の有限次元実線型空間 \mathcal{V} と $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -可積分な可測写像 $\phi: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ に対して, 条件付き期待値 $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$ の $\theta \in \Theta$ によらない代表元がとれることを示したい. \mathcal{V} の基底を一つ固定して成分ごとに考えることにより, 一般性を失わず, $\mathcal{V} = \mathbb{R}$ であると仮定する. さらに, 正の部分と負の部分への分解を考えることにより, 一般性を失わず, $\phi \geq 0$ であると仮定する.

\mathcal{X} 上の可測単関数の増加列 $(\phi_n)_{n \in \mathbb{N}}$ であって, ϕ に各点収束するものをとる. \mathfrak{F} の十分性より, 各 $n \in \mathbb{N}$ に対して, 条件付き期待値 $E_\theta[\phi_n|\mathfrak{F}]$ の $\theta \in \Theta$ によらない代表元 $\phi_{n, \mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ がとれる. 条件付き期待値に対する Lebesgue の収束定理より, 任意の $\theta \in \Theta$ に対して, $(E_\theta[\phi_n|\mathfrak{F}])_{n \in \mathbb{N}}$ は $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$ に P_θ -概収束する. そこで, 関数 $\phi_{\mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ を

$$\phi_{\mathfrak{F}}(x) = \begin{cases} \limsup_{n \rightarrow \infty} \phi_{n, \mathfrak{F}}(x) & (\limsup_{n \rightarrow \infty} \phi_{n, \mathfrak{F}}(x) < \infty) \\ 0 & (\limsup_{n \rightarrow \infty} \phi_{n, \mathfrak{F}}(x) = \infty) \end{cases}$$

と定めると, これは $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$ の $\theta \in \Theta$ によらない代表元である. これで, 主張が示された. \square

\mathfrak{F} が統計モデル $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ に対して十分であるとき, $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -可積分な可測写像 $\phi: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ (\mathcal{V} は有限次元実線型空間) に対して, 条件付き期待値 $E_\theta[\phi|\mathfrak{F}]$ の $\theta \in \Theta$ によらない代表元を, 単に $E[\phi|\mathfrak{F}]$ と書く. これは, $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんど確実に一意に定まる.

補題 1.4 $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとする. μ を \mathcal{X} 上の σ -有限測度とし, 各 P_θ は μ -絶対連続であるとする. このとき, パラメータの列 $(\theta_n)_{n \in \mathbb{N}_{>0}}$ を適当に選んで $Q = \sum_{n=1}^{\infty} 2^{-n} P_{\theta_n}$ と置けば, 各 P_θ は Q -絶対連続となる.

証明 $\mu(\mathcal{X}) = \infty$ ならば, \mathcal{X} の分割 $(\mathcal{X}_i)_{i \in \mathbb{N}_{>0}}$ であって任意の $i \in \mathbb{N}_{>0}$ に対して $0 < \mu(\mathcal{X}_i) < \infty$ を満たすものを取り, 可測集合 $\mathcal{A} \subseteq \mathcal{X}$ に対して

$$\mu'(\mathcal{A}) = \sum_{i=1}^{\infty} 2^{-i} \mu(\mathcal{X}_i)^{-1} \mu(\mathcal{A} \cap \mathcal{X}_i)$$

と定めることにより, μ と同値な有限測度 μ' が得られる. そこで, 一般性を失わず, μ は有限であると仮定する.

各 $\theta \in \Theta$ に対して, Radon–Nikodym 微分 $dP_\theta/d\mu$ の代表元 f_θ を一つ固定し, $\mathcal{S}_\theta = \{x \in \mathcal{X} \mid f_\theta(x) > 0\}$ と置く. μ は有限だから, パラメータの列 $(\theta_n)_{n \in \mathbb{N}_{>0}}$ を,

$$\mu\left(\bigcup_{n=1}^{\infty} \mathcal{S}_{\theta_n}\right) = \sup\left\{\mu\left(\bigcup_{\theta \in \Theta'} \mathcal{S}_\theta\right) \mid \Theta' \text{ は } \Theta \text{ の可算部分集合}\right\}$$

を満たすようにとれる. $Q = \sum_{n=1}^{\infty} 2^{-n} P_{\theta_n}$ と置き, 各 P_θ が Q -絶対連続であることを示す. 可測集合 $\mathcal{A} \subseteq \mathcal{X}$ であって $Q(\mathcal{A}) = 0$ を満たすものを任意にとる. Q の定義より, 任意の $n \in \mathbb{N}_{>0}$ に対して, $P_{\theta_n}(\mathcal{A}) = 0$ だから, $\mu(\mathcal{A} \cap \mathcal{S}_{\theta_n}) = 0$ である. また, $(\theta_n)_{n \in \mathbb{N}_{>0}}$ のとり方より, $\mu(\mathcal{S}_\theta \setminus \bigcup_{n=1}^{\infty} \mathcal{S}_{\theta_n}) = 0$ である. したがって,

$$\mu(\mathcal{A} \cap \mathcal{S}_\theta) \leq \sum_{n=1}^{\infty} \mu(\mathcal{A} \cap \mathcal{S}_{\theta_n}) + \mu\left(\mathcal{S}_\theta \setminus \bigcup_{n=1}^{\infty} \mathcal{S}_{\theta_n}\right) = 0$$

だから, $P_\theta(\mathcal{A}) = 0$ である. よって, P_θ は Q -絶対連続である. \square

定理 1.5 (因子分解定理) $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとする. μ を \mathcal{X} 上の σ -有限測度とし, 各 P_θ は μ -絶対連続であるとする. このとき, \mathcal{X} の可測構造の部分 σ -代数 \mathfrak{F} に対して, 次の条件は同値である.

- (a) \mathfrak{F} は統計モデル $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ に対して十分である.
- (b) 可測関数 $g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ と \mathfrak{F} -可測関数の族 $(h_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0})_{\theta \in \Theta}$ が存在して, 任意の $\theta \in \Theta$ に対して, μ -ほとんどいたるところで $dP_\theta/d\mu = gh_\theta$ が成り立つ.

証明 補題 1.4 より, パラメータの列 $(\theta_n)_{n \in \mathbb{N}_{>0}}$ を適当に選んで $Q = \sum_{n=1}^{\infty} 2^{-n} P_{\theta_n}$ と置けば, 各 P_θ は Q -絶対連続となる. 以下, 条件 (a) と (b) が, ともに次の条件 (c) と同値であることを示す.

- (c) 任意の $\theta \in \Theta$ に対して, Radon–Nikodym 微分 dP_θ/dQ の代表元として, \mathfrak{F} -可測であるものがとれる.

(a) \implies (c) \mathfrak{F} が統計モデル $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ に対して十分であるとする. 可測集合 $\mathcal{A} \subseteq \mathcal{X}$ に対して, 条件付き期待値 $E_\theta[1_{\mathcal{A}} | \mathfrak{F}]$ の $\theta \in \Theta$ によらない代表元 $1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}}: \mathcal{X} \rightarrow [0, 1]$ をとる. $\mathcal{B} \in \mathfrak{F}$ とすると, 任意の $\theta \in \Theta$ に対して

$$\int_{\mathcal{B}} 1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}} dP_\theta = \int_{\mathcal{B}} 1_{\mathcal{A}} dP_\theta$$

だから, 上式で $\theta = \theta_n$ として両辺に 2^{-n} を掛けたものの $n \in \mathbb{N}_{>0}$ にわたる和をとれば,

$$\int_{\mathcal{B}} 1_{\mathcal{A}, \mathfrak{F}} dQ = \int_{\mathcal{B}} 1_{\mathcal{A}} dQ$$

を得る。したがって、 $1_{A, \mathfrak{F}}$ は確率測度 Q に関する条件付き期待値 $E_Q[1_A | \mathfrak{F}]$ の代表元でもある。

$\theta \in \Theta$ とし、可測空間 $(\mathcal{X}, \mathfrak{F})$ 上の確率測度 $P_\theta|_{\mathfrak{F}}$ と $Q|_{\mathfrak{F}}$ を考える。 P_θ が Q -絶対連続であることより $P_\theta|_{\mathfrak{F}}$ は $Q|_{\mathfrak{F}}$ -絶対連続だから、Radon–Nikodym 微分 $dP_\theta|_{\mathfrak{F}}/dQ|_{\mathfrak{F}}$ が定まる。 \mathfrak{F} -可測関数 $dP_\theta|_{\mathfrak{F}}/dQ|_{\mathfrak{F}}$ (の一つの代表元) が dP_θ/dQ の代表元であることを示す。 $A \subseteq \mathcal{X}$ を可測集合とすると、 $1_{A, \mathfrak{F}}$ が条件付き期待値 $E_\theta[1_A | \mathfrak{F}]$ や $E_Q[1_A | \mathfrak{F}]$ の代表元であることより、

$$\begin{aligned} \int_A \frac{dP_\theta|_{\mathfrak{F}}}{dQ|_{\mathfrak{F}}} dQ &= \int_{\mathcal{X}} 1_A \frac{dP_\theta|_{\mathfrak{F}}}{dQ|_{\mathfrak{F}}} dQ \\ &= \int_{\mathcal{X}} 1_{A, \mathfrak{F}} \frac{dP_\theta|_{\mathfrak{F}}}{dQ|_{\mathfrak{F}}} dQ \\ &= \int_{\mathcal{X}} 1_{A, \mathfrak{F}} dP_\theta \\ &= \int_{\mathcal{X}} 1_A dP_\theta \\ &= P_\theta(A) \end{aligned}$$

が成り立つ。 よって、 $(dP_\theta|_{\mathfrak{F}}/dQ|_{\mathfrak{F}}) \cdot Q = P_\theta$ だから、 $dP_\theta|_{\mathfrak{F}}/dQ|_{\mathfrak{F}}$ は dP_θ/dQ の代表元である。

(c) \implies (a) 条件 (c) が成り立つとして、 dP_θ/dQ を \mathfrak{F} -可測関数とみなす。 $A \subseteq \mathcal{X}$ を可測集合とすると、任意の $\theta \in \Theta$ と $B \in \mathfrak{F}$ に対して

$$\int_B E_Q[1_A | \mathfrak{F}] dP_\theta = \int_B E_Q[1_A | \mathfrak{F}] \frac{dP_\theta}{dQ} dQ = \int_B 1_A \frac{dP_\theta}{dQ} dQ = \int_B 1_A dP_\theta$$

だから、 $E_Q[1_A | \mathfrak{F}]$ は条件付き期待値 $E_\theta[1_A | \mathfrak{F}]$ の $\theta \in \Theta$ によらない代表元である。 よって、 \mathfrak{F} は統計モデル $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ に対して十分である。

(b) \implies (c) 条件 (b) を満たす可測関数 $g: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ と \mathfrak{F} -可測関数の族 $(h_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0})_{\theta \in \Theta}$ がとれたとする。 このとき、 $k_1 = \sum_{n=1}^{\infty} 2^{-n} g h_{\theta_n}$ は $\mathbb{R}_{\geq 0}$ に値をとる \mathfrak{F} -可測関数であり、 μ -ほとんどいたるところで $dQ/d\mu = g k_1$ が成り立つ。 $g k_1$ は μ -ほとんどいたるところで有限だから、 k_1 の値 ∞ を 0 に修正して得られる \mathfrak{F} -可測関数を $k: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ と置くと、これも μ -ほとんどいたるところで $dQ/d\mu = g k$ を満たす。

各 $\theta \in \Theta$ に対して、可測関数 $\phi_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ を、

$$\phi_\theta(x) = \begin{cases} h_\theta(x)/k(x) & (k(x) > 0) \\ 0 & (k(x) = 0) \end{cases}$$

と定める。すると、

$$\phi_\theta \cdot Q = \phi_\theta g k \cdot \mu = 1_{\{k>0\}} g h_\theta \cdot \mu = 1_{\{k>0\}} \cdot P_\theta$$

が成り立つ。 さらに、 μ -ほとんどいたるところで $dQ/d\mu = g k$ であることより $\{k = 0\}$ は Q -無視可能だから、 P_θ が Q -絶対連続であることより P_θ -無視可能であり、したがって、 $1_{\{k>0\}} \cdot P_\theta = P_\theta$ である。 よって、 dP_θ/dQ の代表元として、 \mathfrak{F} -可測関数 ϕ_θ がとれる。

(c) \implies (b) 条件 (c) が成り立つとして、 dP_θ/dQ を \mathfrak{F} -可測関数とみなす。 任意の $\theta \in \Theta$ に対して、 $P_\theta = (dQ/d\mu)(dP_\theta/dQ) \cdot \mu$ だから、 $g = dQ/d\mu$, $h_\theta = dP_\theta/dQ$ と置けばよい。 \square

1.3 完備性

定義 1.6 (完備性) $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとする。

- (1) \mathcal{X} の可測構造の部分 σ -代数 \mathfrak{F} がこの統計モデルに対して**完備** (complete) であるとは、任意の \mathfrak{F} -可測統計量 $\phi: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}$ に対して、

$$\text{任意の } \theta \in \Theta \text{ に対して } \phi \text{ が } P_\theta\text{-可積分かつ } E_\theta[\phi] = 0 \implies (P_\theta)_{\theta \in \Theta}\text{-ほとんど確実に } \phi = 0$$

が成り立つことをいう。

- (2) \mathcal{Y} を可測空間とし、 $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{Y}$ を可測統計量とする。 T がこの統計モデルに対して**完備**であるとは、 σ -代数 $\sigma[T]$ がこの統計モデルに対して完備であることをいう。

1.4 指数型分布族

定義 1.7 (指数型分布族) \mathcal{X} を可測空間とする。 \mathcal{X} 上の測度 μ , 可測写像 $h: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ と $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ (\mathcal{V} は有限次元実線型空間), 写像 $c: \Theta \rightarrow \mathcal{V}^*$ と $d: \Theta \rightarrow \mathbb{R}$ (Θ は集合) を用いて

$$P_\theta = f_\theta \cdot \mu, \quad f_\theta(x) = h(x) \exp(\langle c(\theta), T(x) \rangle - d(\theta))$$

と表せる確率測度の族 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ を、 \mathcal{X} 上の**指数型分布族** (exponential family) という。

注意 1.8 定義 1.7 の状況を考える。

- (1) 任意の $\theta \in \Theta$ に対して、 P_θ が \mathcal{X} 上の確率測度であることより、 \mathcal{X} 上の関数 $x \mapsto h(x) \exp(\langle c(\theta), T(x) \rangle)$ は μ -可積分であり、

$$d(\theta) = \log \left(\int_{\mathcal{X}} h(x) \exp(\langle c(\theta), T(x) \rangle) d\mu(x) \right)$$

が成り立つ。

- (2) $h \cdot \mu$ を改めて μ と置くことで、 $h = 1$ であると仮定できる。

命題 1.9 \mathcal{X} を可測空間とする。 \mathcal{X} 上の σ -有限測度 μ , 可測写像 $h: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ と $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ (\mathcal{V} は有限次元実線型空間), 写像 $c: \Theta \rightarrow \mathcal{V}^*$ と $d: \Theta \rightarrow \mathbb{R}$ (Θ は集合) を用いて

$$P_\theta = f_\theta \cdot \mu, \quad f_\theta(x) = h(x) \exp(\langle c(\theta), T(x) \rangle - d(\theta))$$

と表せる指数型分布族 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ を考える。

- (1) T は統計モデル $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ に対して十分である。
(2) $c(\Theta)$ が \mathcal{V} において内点をもつとする。 このとき、 T は統計モデル $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ に対して完備である。

証明 (1) 因子分解定理 (定理 1.5) から従う。

- (2) 一般性を失わず、 $h = 1$ であると仮定する (注意 1.8 (2))。

Doob–Dynkin の補題より、 \mathcal{X} から \mathbb{R} への任意の $\sigma[T]$ -可測統計量は、可測写像 $T: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ を用いて $\phi \circ T$ と表せる。 任意の $\theta \in \Theta$ に対して、 $\phi \circ T$ は P_θ -可積分で $E_\theta[\phi \circ T] = 0$ を満たすと仮定する。 任意の $\theta \in \Theta$ に対して、

$$\begin{aligned} E_\theta[\phi \circ T] &= \int_{\mathcal{X}} \phi(T(x)) \exp(\langle c(\theta), T(x) \rangle - d(\theta)) d\mu(x) \\ &= e^{-d(\theta)} \int_{\mathcal{V}} \phi(v) \exp(\langle c(\theta), v \rangle) dT_*\mu(v) \end{aligned}$$

だから、上記の仮定は、任意の $\alpha \in c(\Theta)$ に対して

$$\int_{\mathcal{V}} \phi(v) \exp(\langle \alpha, v \rangle) dT_*\mu(v) = 0$$

であることを意味する。さらに、 $\beta \in \mathcal{V}^*$ とすると、関数 $v \mapsto \phi(v) \exp(\langle \alpha, v \rangle)$ が $T_*\mu$ -可積分であることからこれと絶対値が等しい関数 $v \mapsto \phi(v) \exp(\langle \alpha - i\beta, v \rangle)$ も $T_*\mu$ -可積分であり、積分記号下の微分に関する定理を用いて確かめられるように、 $c(\Theta)^\circ + i\mathcal{V}^*$ 上の関数 $\alpha - i\beta \mapsto \int_{\mathcal{V}} \phi(v) \exp(\langle \alpha - i\beta, v \rangle) dT_*\mu(v)$ は正則である。ところが、 $\beta = 0$ のときはこの積分は 0 だから、一致の定理より、任意の $\alpha - i\beta \in c(\Theta)^\circ + i\mathcal{V}^*$ に対して

$$\int_{\mathcal{V}} \phi(v) \exp(\langle \alpha - i\beta, v \rangle) dT_*\mu(v) = 0$$

が成り立つ。 $\alpha \in c(\Theta)^\circ$ を固定すると、上式の左辺を $\beta \in \mathcal{V}^*$ の関数とみなしたものは、 \mathcal{V} 上の有限 Borel 測度 $\phi \exp(\langle \alpha, - \rangle) \cdot T_*\mu(v)$ の Fourier 変換である。したがって、Fourier 変換の単射性より

$$\phi \exp(\langle \alpha, - \rangle) \cdot T_*\mu(v) = 0$$

だから、 $T_*\mu$ -ほとんどいたるところで $\phi = 0$ である。すなわち、 μ -ほとんどいたるところで $\phi \circ T = 0$ である。特に、 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんど確実に $\phi \circ T = 0$ である。以上より、 T は統計モデル $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ に対して完備である。□

2 推定

2.1 不偏推定量

定義 2.1 (不偏推定量) $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとし、 \mathcal{V} を有限次元実線型空間、 $g: \Theta \rightarrow \mathcal{V}$ を写像とする。可測統計量 $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ が $g(\theta)$ の**不偏推定量** (unbiased estimator) であるとは、任意の $\theta \in \Theta$ に対して、 δ が P_θ -可積分かつ $E_\theta[\delta] = g(\theta)$ を満たすことをいう。

定義 2.2 (一様最小分散不偏推定量) $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとし、 \mathcal{V} を有限次元実内積空間、 $g: \Theta \rightarrow \mathcal{V}$ を写像とする。 $g(\theta)$ の**一様最小分散不偏推定量** (uniformly minimum-variance unbiased estimator, UMVUE) とは、 $g(\theta)$ の不偏推定量 $\delta_0: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ であって、 $g(\theta)$ の任意の不偏推定量 $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ と $\theta \in \Theta$ に対して

$$E_\theta[\|\delta_0 - g(\theta)\|^2] \leq E_\theta[\|\delta - g(\theta)\|^2]$$

を満たすものをいう。

定理 2.3 (Rao–Blackwell の定理) $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとし、 \mathcal{X} の可測構造の部分 σ -代数 \mathfrak{F} はこれに対して十分であるとする。 \mathcal{V} を有限次元実線型空間、 $g: \Theta \rightarrow \mathcal{V}$ を写像とし、 $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ を $g(\theta)$ の不偏推定量とする。

- (1) $E[\delta|\mathfrak{F}]$ は $g(\theta)$ の不偏推定量である。
- (2) $w: \Theta \times \mathcal{V} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ は関数であり、任意の $\theta \in \Theta$ に対して $w(\theta, -)$ は凸であるとする。このとき、任意の $\theta \in \Theta$ に対して、

$$E_\theta[w(\theta, E[\delta|\mathfrak{F}])] \leq E_\theta[w(\theta, \delta)]$$

が成り立つ。特に、 \mathcal{V} が内積空間ならば、 $g(\theta)$ の任意の不偏推定量 $\delta': \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ と $\theta \in \Theta$ に対して、

$$E_\theta[\|E[\delta|\mathfrak{F}] - g(\theta)\|^2] \leq E_\theta[\|\delta - g(\theta)\|^2]$$

が成り立つ。

証明 (1) 条件付き期待値の性質より、任意の $\theta \in \Theta$ に対して、 $E[\delta|\mathfrak{F}]$ は P_θ -可積分であり $E_\theta[E[\delta|\mathfrak{F}]] = E_\theta[\delta] = g(\theta)$ が成り立つ。よって、 $E[\delta|\mathfrak{F}]$ は $g(\theta)$ の不偏推定量である。

(2) 前半の主張は、条件付き期待値に対する Jensen の不等式から従う。前半の主張において $w(\theta, v) = \|v - g(\theta)\|^2$ とすれば、後半の主張が従う。 \square

定理 2.4 (Lehmann–Scheffé の定理) $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとし、 \mathcal{X} の可測構造の部分 σ -代数 \mathfrak{F} はこれに対して完備かつ十分であるとする。 \mathcal{V} を有限次元実線型空間とし、 $g: \Theta \rightarrow \mathcal{V}$ を写像とする。

- (1) $g(\theta)$ の不偏推定量が存在するとする。このとき、 \mathfrak{F} -可測な $g(\theta)$ の不偏推定量が、 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんど確実に一意に存在する。
- (2) $\delta_0, \delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ を $g(\theta)$ の不偏推定量とし、 δ_0 は \mathfrak{F} -可測であるとする。 $w: \Theta \times \mathcal{V} \rightarrow \overline{\mathbb{R}}_{\geq 0}$ は関数であり、任意の $\theta \in \Theta$ に対して $w(\theta, -)$ は凸であるとする。このとき、任意の $\theta \in \Theta$ に対して、

$$E_\theta[w(\theta, \delta_0)] \leq E_\theta[w(\theta, \delta)]$$

が成り立つ。特に、 \mathcal{V} が有限次元実内積空間ならば、 δ_0 は $g(\theta)$ の一様最小分散不偏推定量である。

証明 (1) 存在 $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ を $g(\theta)$ の不偏推定量とすると、Rao–Blackwell の定理 (定理 2.3 (1)) より、 $E[\delta|\mathfrak{F}]$ は \mathfrak{F} -可測な $g(\theta)$ の不偏推定量である。

一意性 $\delta_0, \delta'_0: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{V}$ がともに \mathfrak{F} -可測な $g(\theta)$ の不偏推定量であるとする。このとき、任意の $\theta \in \Theta$ に対して $E_\theta[\delta_0 - \delta'_0] = g(\theta) - g(\theta) = 0$ だから、 \mathfrak{F} の完備性より、 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんど確実に $\delta_0 - \delta'_0 = 0$ が成り立つ。

(2) Rao–Blackwell の定理 (定理 2.3 (1)) より、 $E[\delta|\mathfrak{F}]$ は \mathfrak{F} -可測な $g(\theta)$ の不偏推定量だから、(1) の一意性より、 $(P_\theta)_{\theta \in \Theta}$ -ほとんど確実に $\delta_0 = E[\delta|\mathfrak{F}]$ である。よって、主張は、Rao–Blackwell の定理 (定理 2.3 (2)) から従う。 \square

2.2 Fisher 情報量

定義 2.5 (Fisher 情報量) $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとし、パラメータ空間 Θ は有限次元実線型空間 \mathcal{V} の開集合であるとする。 μ を \mathcal{X} 上の測度とし、各 P_θ は可測関数 $f_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ を用いて $f_\theta \cdot \mu$ と表されているとする。 $\theta_0 \in \Theta$ とし、次の条件が満たされるとする。

- (FI1) μ -ほとんどすべての $x \in \mathcal{X}$ に対して、関数 $\theta \mapsto f_\theta(x)$ は、 θ_0 のある近傍において正であり、 θ_0 において微分可能である (したがって、微分 $(D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0}$ が定義される)。
- (FI2) \mathcal{X} 上 μ -ほとんどいたるところで定義され \mathcal{V}^* に値をとる写像 $x \mapsto (D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0}$ は、 P_{θ_0} -2 乗可積分である。

このとき、

$$I(\theta_0) = E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes (D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}]$$

と定め、これを統計モデル $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ の θ_0 における **Fisher 情報量** (Fisher information) という。

定義 2.5 の状況で、Fisher 情報量 $I(\theta_0)$ は、正値対称テンソルである。すなわち、 \mathcal{V} 上の双線型形式 $(v, w) \mapsto \langle I(\theta_0), v \otimes w \rangle$ は対称であり、任意の $v \in \mathcal{V}$ に対して $\langle I(\theta_0), v \otimes v \rangle \geq 0$ である。

注意 2.6 定義 2.5 の状況を考える。パラメータ θ_0 の下での $(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}$ の期待値 (いま, $(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}$ は P_{θ_0} -2 乗可積分であると仮定しているから、この期待値が定義される) は、

$$\begin{aligned} E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}] &= \int_{\mathcal{X}} (D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0} f_{\theta_0}(x) d\mu(x) \\ &= \int_{\mathcal{X}} (D_\theta f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0} d\mu(x) \end{aligned}$$

と表せる。ここで、微分と積分の順序交換ができると仮定すると、

$$E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}] = \left(D_\theta \int_{\mathcal{X}} f_\theta(x) d\mu(x) \right) \Big|_{\theta=\theta_0} = (D_\theta 1)|_{\theta=\theta_0} = 0$$

となる。これが成り立つとき、Fisher 情報量は、

$$I(\theta_0) = \text{Var}_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}]$$

とも書ける。

積分記号下の微分に関する定理より、 μ -可積分関数 $h: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ 、 μ -無視可能な集合 $\mathcal{N} \subseteq \mathcal{X}$ 、 θ_0 の近傍 $\Xi \subseteq \Theta$ が存在して次の条件を満たす場合には、前段で述べた微分と積分の順序交換を正当化できる。

- (i) 任意の $x \in \mathcal{X} \setminus \mathcal{N}$ に対して、関数 $\theta \mapsto f_\theta(x)$ は Ξ 上で微分可能である。
- (ii) 任意の $\theta_1 \in \Xi$ に対して、 μ -ほとんどすべての $x \in \mathcal{X} \setminus \mathcal{N}$ に対して $\|(D_\theta f_\theta(x))|_{\theta=\theta_1}\|_{\mathcal{V}} \leq h(x)$ が成り立つ。

ここで、 \mathcal{V} 上のノルム $\|\cdot\|_{\mathcal{V}}$ を一つ固定した (有限次元実線型空間上のノルムはすべて同値だから、上記の条件を成否は、このノルムのとり方には依存しない)。

\mathcal{V} を (可換体上の) 有限次元線型空間、 $T \in \mathcal{V}^* \otimes \mathcal{V}^*$ を非退化対称テンソルとすると、 T は線型同型写像 $\Phi: \mathcal{V} \rightarrow \mathcal{V}^*$ を定める。 T を $\Phi^{-1} \otimes \Phi^{-1}$ で移して得られる非退化対称テンソル $T^\vee = (\Phi^{-1} \otimes \Phi^{-1})(T) \in \mathcal{V} \otimes \mathcal{V}$ を、 T の**逆形式** (inverse form) という。

定理 2.7 (Cramér–Rao の不等式) $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとし、パラメータ空間 Θ は有限次元実線型空間 \mathcal{V} の開集合であるとする。 μ を \mathcal{X} 上の測度とし、各 P_θ は可測関数 $f_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ を用いて $f_\theta \cdot \mu$ と表されているとする。 \mathcal{W} を有限次元実線型空間、 $g: \Theta \rightarrow \mathcal{W}$ を写像とし、 $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{W}$ を可測統計量とする。 $\theta_0 \in \Theta$ とし、次の条件が満たされるとする (条件 (FI1) と (FI2) は、定義 2.5 のものと同一である)。

- (FI1) μ -ほとんどすべての $x \in \mathcal{X}$ に対して、関数 $\theta \mapsto f_\theta(x)$ は、 θ_0 のある近傍において正であり、 θ_0 において微分可能である (したがって、微分 $(D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0}$ が定義される)。
- (FI2) \mathcal{X} 上 μ -ほとんどいたるところで定義され \mathcal{V}^* に値をとる写像 $x \mapsto (D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0}$ は、 P_{θ_0} -2 乗可積分である。
- (FI3) Fisher 情報量 $I(\theta_0)$ は非退化である (したがって、逆形式 $I(\theta)^\vee \in \mathcal{V} \otimes \mathcal{V}$ が定義される)。

(FI4) g は θ_0 において微分可能であり (したがって, 微分 $Dg(\theta_0)$ が定義される), δ は P_{θ_0} -2 乗可積分であり,

$$\begin{aligned} E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}] &= 0, \\ E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta] &= Dg(\theta_0) \end{aligned}$$

が成り立つ (いま, $(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}$ と δ は 2 乗可積分であると仮定しているから, 上式の左辺の期待値が定義される).

このとき,

$$\text{Var}_{\theta_0}[\delta] \geq (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee)$$

が成り立つ.

証明 $I(\theta_0)$ が定める \mathcal{V} から \mathcal{V}^* への線型同型写像を $\Phi: \mathcal{V} \rightarrow \mathcal{V}^*$ と書き, $u(x) = \Phi^{-1}((D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0}) \in \mathcal{V}$ と置く. $(D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0}$ は μ -ほとんどすべての $x \in \mathcal{X}$ に対して定義され x の関数として P_{θ_0} -2 乗可積分だから, $u(x)$ も同様である. また, 条件 (ii) より,

$$E_{\theta_0}[u] = \Phi^{-1}(E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}]) = 0, \quad (*)$$

$$E_{\theta_0}[u \otimes \delta] = (\Phi^{-1} \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta]) = (\Phi^{-1} \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(Dg(\theta_0)) \quad (**)$$

かつ

$$\begin{aligned} \text{Var}_{\theta_0}[u] &= (\Phi^{-1} \otimes \Phi^{-1})(\text{Var}_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}]) \\ &= (\Phi^{-1} \otimes \Phi^{-1})(I(\theta_0)) \\ &= I(\theta_0)^\vee \end{aligned} \quad (***)$$

である.

以下,

$$\begin{aligned} \text{Var}_{\theta_0}[\delta - Dg(\theta_0) \circ u] \\ = \text{Var}_{\theta_0}[\delta] - \text{Cov}_{\theta_0}[\delta, Dg(\theta_0) \circ u] - \text{Cov}_{\theta_0}[Dg(\theta_0) \circ u, \delta] + \text{Var}_{\theta_0}[Dg(\theta_0) \circ u] \end{aligned} \quad (****)$$

の左辺の各項を計算する. まず, (***) より,

$$\begin{aligned} \text{Var}_{\theta_0}[Dg(\theta_0) \circ u] &= (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(\text{Var}_{\theta_0}[u]) \\ &= (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) \end{aligned}$$

である. 次に, (*) と (**) より,

$$\begin{aligned} \text{Cov}_{\theta_0}[Dg(\theta_0) \circ u, \delta] &= (Dg(\theta_0) \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(\text{Cov}_{\theta_0}[u, \delta]) \\ &= (Dg(\theta_0) \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(E_{\theta_0}[(u - E_{\theta_0}[u]) \otimes (\delta - E_{\theta_0}[\delta])]) \\ &= (Dg(\theta_0) \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(E_{\theta_0}[u \otimes \delta]) \\ &= (Dg(\theta_0)\Phi^{-1} \otimes \text{id}_{\mathcal{W}})(Dg(\theta_0)) \\ &= (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) \end{aligned}$$

である（最後の等号は、両辺とも $I(\theta_0)^\vee \in \mathcal{V} \otimes \mathcal{V}$ と二つの $Dg(\theta_0) \in \mathcal{V}^* \otimes \mathcal{W}$ の縮約であることから成り立つ）。これらを (***) に代入すると

$$\begin{aligned} & \text{Var}_{\theta_0}[\delta - Dg(\theta_0) \circ u] \\ &= \text{Var}_{\theta_0}[\delta] - (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) - (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) + (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) \\ &= \text{Var}_{\theta_0}[\delta] - (Dg(\theta_0) \otimes Dg(\theta_0))(I(\theta_0)^\vee) \end{aligned}$$

となり、 $\text{Var}_{\theta_0}[\delta - Dg(\theta_0) \circ u] \geq 0$ であることと合わせて、主張の不等式を得る。 \square

注意 2.8 定理 2.7 の状況で、条件 (FI1) と (FI2) が成り立ち、さらに、 μ -可積分関数 $h: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ 、 μ -無視可能な集合 $\mathcal{N} \subseteq \mathcal{X}$ 、 θ_0 の近傍 $\Xi \subseteq \Theta$ が存在して次の条件を満たすとする。

- (i) 任意の $x \in \mathcal{X} \setminus \mathcal{N}$ に対して、関数 $\theta \mapsto f_\theta(x)$ は Ξ 上で微分可能である。
- (ii) 任意の $\theta_1 \in \Xi$ に対して、 μ -ほとんどすべての $x \in \mathcal{X} \setminus \mathcal{N}$ に対して $\|(D_\theta f_\theta(x))|_{\theta=\theta_1}\|_{\mathcal{V}}$, $\|(D_\theta(f_\theta(x)\delta(x)))|_{\theta=\theta_1}\|_{\text{Hom}(\mathcal{V}, \mathcal{W})} \leq h(x)$ が成り立つ。
- (iii) δ は P_{θ_0} -2 乗可積分な $g(\theta)$ の不偏推定量である。

ここで、 \mathcal{V} 上のノルム $\|\cdot\|_{\mathcal{V}}$ と $\text{Hom}(\mathcal{V}, \mathcal{W})$ 上のノルム $\|\cdot\|_{\text{Hom}(\mathcal{V}, \mathcal{W})}$ を一つずつ固定した（有限次元実線型空間上のノルムはすべて同値だから、上記の条件を成否は、これらのノルムのとり方には依存しない）。このとき、条件 (FI4) が成り立つことを示そう。

δ が P_{θ_0} -2 乗可積分であることは仮定 (iii) に含まれており、仮定 (i) と (ii) より $E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0}] = 0$ が成り立つ（注意 2.6）。次に、 $E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta]$ について考える。この期待値は、

$$\begin{aligned} E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta] &= \int_{\mathcal{X}} (D_\theta \log f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0} f_{\theta_0}(x) \otimes \delta(x) d\mu(x) \\ &= \int_{\mathcal{X}} (D_\theta f_\theta(x))|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta(x) d\mu(x) \\ &= \int_{\mathcal{X}} (D_\theta(f_\theta(x)\delta(x)))|_{\theta=\theta_0} d\mu(x) \end{aligned} \quad (*)$$

と表せる。一方で、 δ が $g(\theta)$ の不偏推定量であること（仮定 (iii)）より

$$g(\theta) = E_\theta[\delta] = \int_{\mathcal{X}} f_\theta(x)\delta(x) d\mu(x)$$

だから、仮定 (i), (ii) と積分記号下の微分に関する定理より、 g は θ_0 において微分可能であり、

$$Dg(\theta_0) = \int_{\mathcal{X}} (D_\theta(f_\theta(x)\delta(x)))|_{\theta=\theta_0} d\mu(x) \quad (**)$$

が成り立つ。(*) と (**) を比較して、 $E_{\theta_0}[(D_\theta \log f_\theta)|_{\theta=\theta_0} \otimes \delta] = Dg(\theta_0)$ を得る。これで、主張が示された。

2.3 最尤推定量

定義 2.9（最尤推定量） $(\mathcal{X}, (P_\theta)_{\theta \in \Theta})$ を統計モデルとする。 μ を \mathcal{X} 上の測度とし、各 P_θ は可測関数 $f_\theta: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ を用いて $f_\theta \cdot \mu$ と表されているとする。写像 $\delta: \mathcal{X} \rightarrow \Theta$ が θ の **最尤推定量** (maximum likelihood estimator, MLE) であるとは、任意の $x \in \mathcal{X}$ に対して、 Θ 上の関数 $\theta \mapsto f_\theta(x)$ が $\theta = \delta(x)$ において最大値をとることをいう。

参考文献

- [1] 野田一雄, 宮岡悦良, 『入門・演習 数理統計』, 共立出版, 1990.
- [2] 吉田朋広, 『数理統計学』, 朝倉書店, 2006.